

「新しい東北」官民連携推進協議会

**令和4年度
意見交換会(第3回)**

福島県

「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

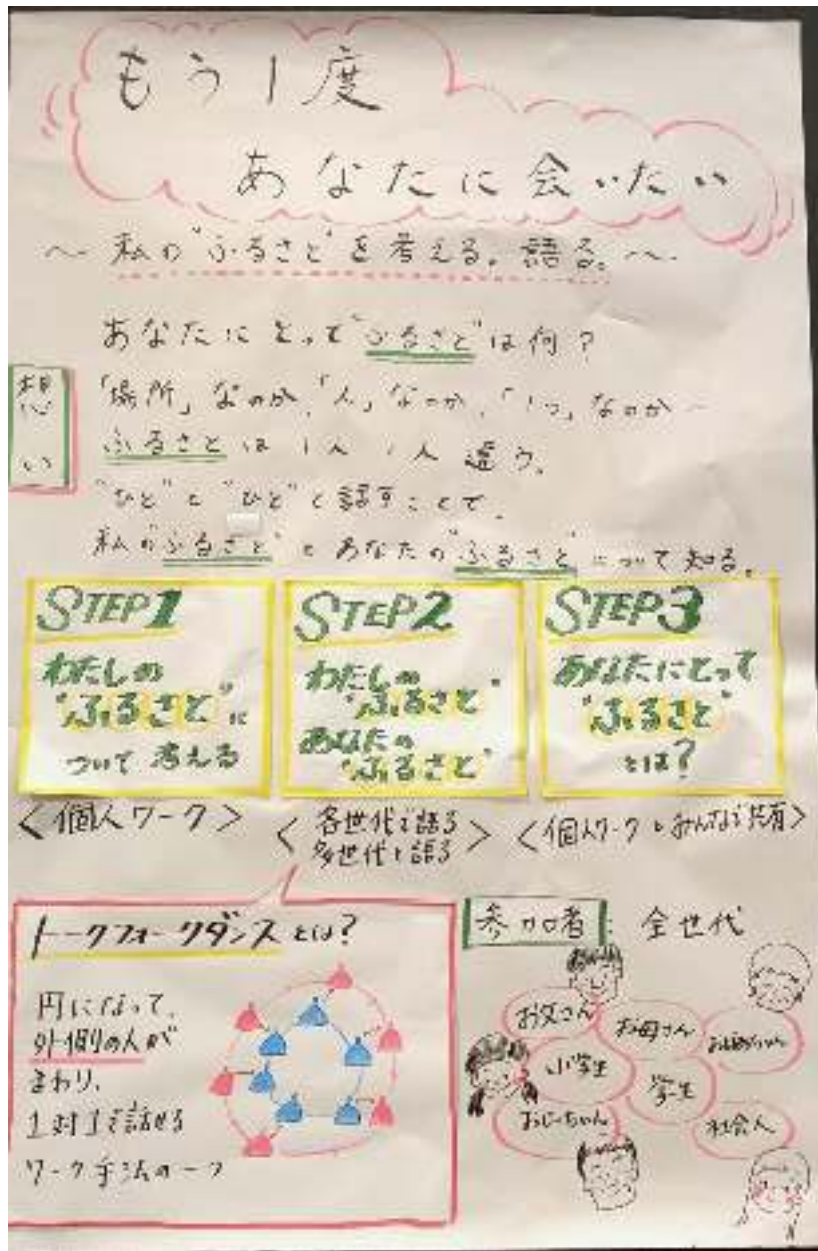
2023年3月1日

1. 実践の場の開催概要・結果
2. 次年度の取組に関する意見交換（論点①）
3. 今後の協議会運営に関する意見交換（論点②）

● 1. 実践の場の開催概要・結果

開催日	2023年2月16日（木）・17日（金）	開催場所	福島県双葉郡
企画目的	<ul style="list-style-type: none">○ 福島が直面する人口減少や高齢化、産業の担い手不足などの課題の解決に向けて、2023 年度以降、福島の復興のシンボルである「J-VILLAGE」を舞台に県内外の若者たちが「持続可能な地域づくり」を考える「話し合いの場」を作る予定○ 「話し合いの場」に向けた準備を行うプロジェクトとして、県内外の大学生、若手の社会人に参加いただき、福島県浜通りの視察、地域課題の解決に向けて地元で活躍している方々とのディスカッション、グループワークを通じて、次年度の「話し合いの場」の具体的な議論のテーマなどのプログラム案を検討		
実施内容 p.10-12参照	<ul style="list-style-type: none">○ 視察（東日本大震災・原子力災害伝承館、中間貯蔵施設、福島しろはとファーム）○ 地元で活躍している方々とのディスカッション○ 福島の現状や課題に関するグループディスカッション○ 次年度の「話し合いの場」のテーマ等に関するグループディスカッション・記者発表		
参加者 p.13参照	<ul style="list-style-type: none">○ 若者 14名（県内大学生 5 名、県外大学生7名、県内社会人 2 名）○ J-VILLAGE・副代表団体・復興庁・事務局		

● 1. 実践の場の開催概要・結果（Aチーム発表）



もう1度 あなたに会いたい ～ 私の“ふるさと”を考える。語る。～

私たちが考えたテーマは、「もう一度、あなたに会いたい～私のふるさとを考える、語る～」です。
さて、ふるさとと聞いて何を考え、思い浮かべますか。

登下校の帰り道でしょうか。親や友達顔でしょうか。家の近所にある城や寺でしょうか。私は大阪・岸和田市の出身です。だんじり祭りが有名で、そのだんじりや友達を思い浮かべました。

ふるとは「場所」なのでしょうか。それとも友人といった「人」なのでしょうか。それはひとつでしょうか。私は大学が東京にあり、授業で福島・飯館村を訪れました。そこで訪れるにあたって、飯館村を福島ふるさとなんじゃないか、と少しずつ思うようになりました。ふるとはひとつじゃないかもしれません。そして、ふるとは一人一人違うんじゃないでしょうか。

対話する中で、自分の、また相手のふるさとを知ることによってそこに愛着が湧き、真に自分のふるさとのように感じるのではないのでしょうか。そして、自分は対話した相手のふるさとを訪れ、相手は私のふるさとを訪れると、関係人口は増えていくのではないのでしょうか。そうした思いを叶えるために、私たちはこの事業を提案しました。

まずステップ①、私のふるさとについて考える。これは自分のふるさとを考えるパートです。

ステップ②、「私のふるさと、あなたのふるさと」です。これは、各世代と語るというものです。そこで私たちは形式として「トークマーズダンス」というものを採用したいと思います。これは、二重の円になって、外側の人が回り、1対1で話せるというものです。そして、じっくり話すのです。これをする前にアイスブレイクとして、同世代数人で集まって交流してもらいます。その後、多世代で語ってもらいます。例えば、青のグループは20代、赤のグループは60代、と語り合ってもらうことで、新たな示唆が得られると考えています。

そして、ステップ③、「あなたにとってふるさととは？」です。これはステップ①と同じことを聞いているのですが、ステップ②の多世代の交流で意見や考えが変わったりすると思うので、それを振り返り、共有をしたいと思います。ステップ①とステップ③で参加者に記入してもらい、自分のふるさとについての意見、価値観の違いを記録することでこの事業の成果としたいと考えています。

参加者は全世代を想定しています。お父さん、お母さん、子供世代、全てに参加してもらいたいと考えています。県内だけでなく県外からも来てもらいたいと考えています。グループは近い年代で分けたいと考えています。企業に勤めている方は色々な肩書があると思いますが、それは度外視して自分個人の考えでふるさとについて考えてほしいと思っています。

開催する場所はJヴィレッジが相応しいと考えています。特にJヴィレッジは日本の復興の象徴です。その場所で自分のふるさとについて考えることは重要だと思います。Jヴィレッジの芝生の上で考え、語り合うことが素晴らしいと思います。語り合った後に、相手に対して「もう一度あなたに会いたい」と言えるようになれば、この企画は成功したと言えると思います。以上です。

＜質疑応答＞

Q.日本のふるさとについて語り合う、という取組だが、参加者は浜通りの人が中心となるのでしょうか。

A.浜通りの方々だけでなく、県内または県外から来て欲しいと考えています。

● 1. 実践の場の開催概要・結果（Bチーム発表）

目指したい 目指すべき 未来姿は？

背景 私たちが感じたこと

“復興”という言葉、本当に合ってる？
 元に戻すこと？それより発展させること？
 ④ 地域ごとに背景や現状が異なり、より複雑化している。

参加者間で **目標合わせ**

みんなが共通で 目指したい 目指すべき **未来の姿** を決めたい！！

参加者

① 浜通りの定住者 移住者
 ② 浜通りに関心のある人

高年層がバランスポイントを多く集めるように
 30名程度を募集する。

実施方法

事前 アンケート調査と集約
 1日目 親睦会
 2,3日目 情報収集
 4,5日目 交流会 ディスカッション

効果

① 共通の志を持つ
 ② 地域を元気づける
 ③ ボトムアップ形式の意見収集

展望

① 興味のある人を増やす
 ② つながり続けるコミュニティの生成拡大
 ③ 福島を起点にこの活動を全国へ！！

目指したい、目指すべき未来の姿は？

私たちB班は、「目指したい、目指すべき未来の姿は？」というテーマのもと、話し合いの場を持ちたいと考えました。このテーマ設定のご協力として、敢えて主語を置いていないというのがあります。一人一人、目指したい街の姿であったり、こんな風になつたらいいな、復興したな、と感じる点は様々です。また、行政や街としての目指すべき姿も街ごとに異なります。今後、福島へ興味を持ってもらうにあたって、コミュニティの場が広がっていくと考えられます。そう考えると、「私たち」という主語を置いたときに、この「私たち」の定義が変わってくるはず。また、「私たち」という主語を置いた場合、コミュニティに入りづかったり、置いてけぼりにされている、と感じる人も出てくると思います。このような背景から、私たちは主語を置かないテーマを考えました。

テーマ設定の背景です。私たちは視察を通して、復興という言葉の意味について疑問を持つようになりました。復興って震災前の状態に戻すことでしょうか。それより、震災前の街の状況よりも発展させることですか。そもそも震災後、新しい取組を始めている時点で元の街に戻そうとしていること自体、違うのではないかと私たちは思うようになりました。また、福島では地域毎に背景や復興の状況が異なり、複雑化している現状があります。そのため、このような背景から復興に対するイメージや目指している復興がバラバラという現状があることに気がきました。参加者間、それよりもっと大きい範囲での目指すべき姿、**復興という言葉を使わずに何かひとつのものに向かっていく指標となるものを作っていけたら**、とこのテーマを設定しました。

具体的な実施内容について説明させていただきます。2とおりのグループに参加していただきたいと考えています。**浜通りの定住者、移住者の方々と浜通りに関心のある方々**のグループです。各年代が偏りなく、参加しただけでいいと考えています。**人数は30人**ほどを想定しています。

実施の行程ですが、長いですが**4泊5日**ほどを想定しています。まず0日目として、参加して下さる方々に**ありのままの福島のイメージや印象を事前にアンケート**を実施します。こちらとしてもそれを聞いて参考にしつつ、参加者としても「自分は福島をこういう風に考えていたんだ」と知ってもらおうと思っています。

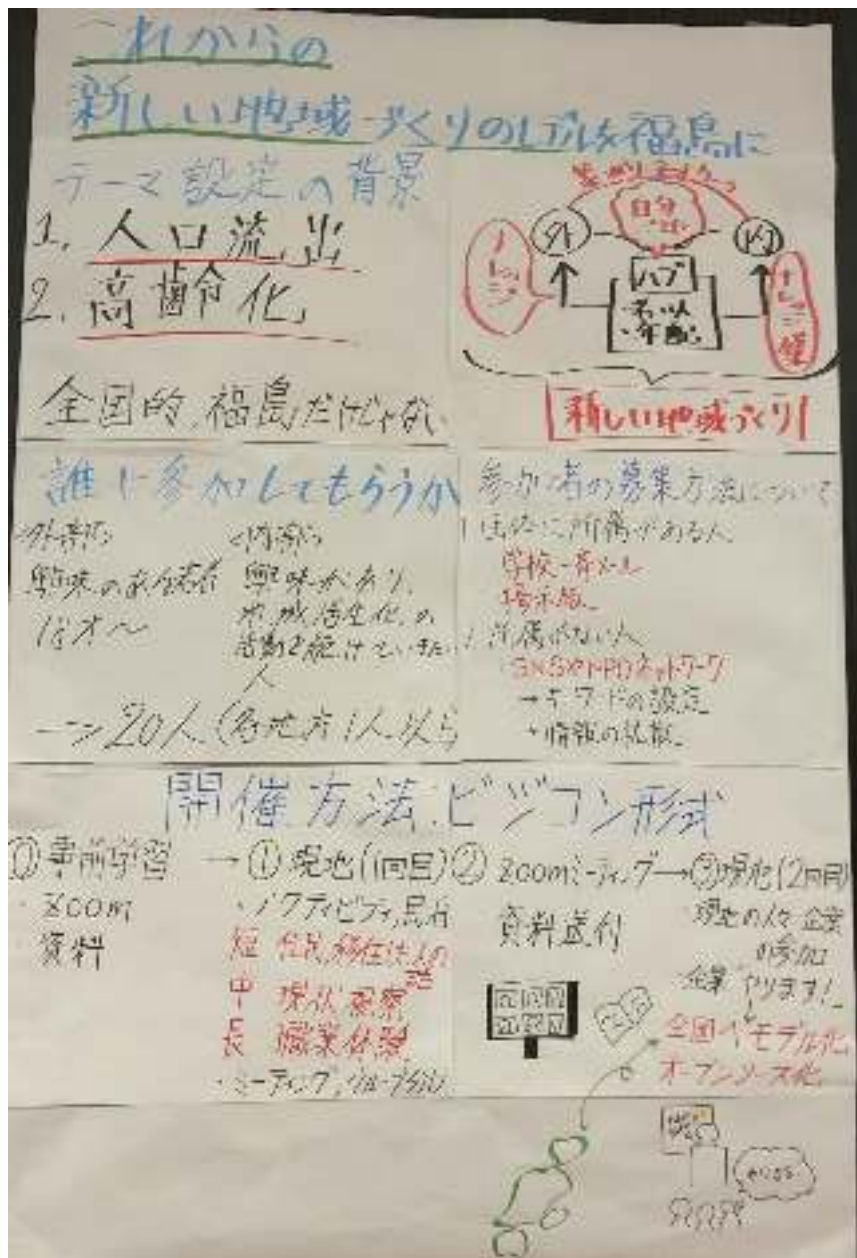
まず1日目は、それぞれのグループ、まとめて親睦会をしようと考えています。これは**鹿又のさつまいも掘りや乗馬を体験**したり、実際に福島にある体験をしてもらい、福島を知ってもらい、親睦を深めたいと考えています。2,3日目で視察という形で福島内を見てもらいます。**伝承館や中間貯蔵施設を視察**してもらって、知ってもらいたいと思います。4,5日目で実際に**交流会、ディスカッション**を通じて、「目指したい、目指すべき姿」はどういうものなのか、詰めていきたい。最後は、**宣言書**という形で出していきたいと考えています。

この活動の効果として、一番大きなものは共通の志を持てるところと考えます。それぞれ活動していても目指すところが違ったり、それぞれが正反対に行ってしまうことも否めないと思います。具体的な活動をする前に、目標を定めて同じ目標に向けて進む、という絵が大事だと考えています。また、ギャップを埋めたり、活用するということも大事と考えています。ギャップを活用するのは、ディスカッションにおいて福島内、外で考えていることをミックスして新しい知見を生み出したり、ギャップを埋めるためには親睦会や交流会で実際に声を聞くことで正しい情報や知識を得られると考えています。3つ目のボトムアップ形式の意見収集で、普段は聞くことの出来ない意見を聞くことができると考えています。

最後に今後の展望についてです。現在は福島に関心のある人に限定されていますが、これを講演会やフォーラムを通じて国内、ひいては世界に発信していけたら、興味のある人を増やせると思います。また、興味のある人を増やすだけではなく、その人々を繋げる、または繋がり続けるコミュニティを生成し、継続して運営していくことが大事かと考えています。

この活動は福島だけでなく、国内、海外にも通用する考え方と思うので、福島を起点にこの活動を全国に広めていければと考えています。

● 1. 実践の場の開催概要・結果（Cチーム発表）



これからの新しい地域づくりのモデルを福島に

私たちのチームが考えたテーマは「これからの新しい地域づくりのモデルを福島に」です。福島と言えば、復興、復興と12年ほど言われ続けてきたのですが、ここで最先端として何か出来ないかということで、私たちが目指す最終的なゴールが「地域づくりのモデル化」ということです。ここに関わってくるのが、内部の人達と外部の人達です。それで、外部の人達というのは、イメージが付くと思いますが、福島を訪れる人達、内部の人達というのは、福島をふるさとする人達のことです。その人達が福島島の「浜通り」をハブとして様々なプロジェクトを行っています。そこで得られたものを、外の人達にとってはナレッジ、内部の人達にとってはナレッジと共に地域づくり。その成果自体がギフトとして得られていく、そのようなwin-winの関係のもと、新しい地域づくりのモデル化を目指していきます。

このテーマに至った背景ですが、昨日、視察を3か所行きました。伝承館から始まり、中間貯蔵施設としてはファームで様々な資料を見て、地元の皆さんのお話を聞いて、その中で問題が幾つか見えてきたのです。若者が少ない、仕事がない、といった問題を出し合った時、最終的に2つの大きな問題にまとめられると思います。一つ目が人口流出です。これは県内の都市の方へ行ってしまう若者の流出も含まれるんですが、それと共に12年前に福島の外へ出ていったり、戻って来ない人達も含んでいます。

二番目は「高齢化」です。これは福島だけではなく、全国的な課題かと思えます。ですので、**福島・浜通りをハブとして、全国、県内から多くの人達が集まって、一緒に色んなことをやって、そこで得られた知識というのを地域づくりに固定化してって全国に普及していけたら**と、私たちは考えました。

参加者については**全国から**募ります。現在は浜通りに住んでいないけれども、地域創生に興味のある18歳以上の若者、また現在浜通りに住んでいて、地域活性化に興味がある**若者**が対象です。全体で**20人**ほどを集めたいと考えています。

参加者の募集方法ですが、大学などの団体に所属している人に対しては、学校への一斉メールや掲示板を通じて募集します。団体に所属していない人については、NPOやNPOを通じてSNSを使って募集します。SNSでは「地域創生」や「移住」などのキーワードを使って拡散し、多くの方にこの活動を知ってもらいたいと考えています。

具体的な開催内容を説明します。まずは、**事前学習**として、zoomや資料を通じて福島の実況について知ってもらいます。その後、実際に**浜通りに来て、アクティビティや民泊**を行います。ここではアクティビティを短期、中期、長期の3つ設定していて、それぞれの参加者の希望に応じて選択できるようになっています。

具体的なアクティビティの内容としては、住民や移住した人の話を聞くことや、現状を視察したり、農業などの実際の職業を体験することを考えています。その後、アクティビティを通じて学んだことや考えたことをもとに、**ミーティングとグループ分け**を行います。その後、各グループごとにzoomなどで具体的なプランを考えていきます。最終的には、そこでまとめた地域創生のプランを企業の方々を含めた浜通りの人々に対して、**プレゼン**します。そこで賛同が得られたものについては、**企業と共同で実行**に移していく、ということを考えています。

ここでまた、モデル化の話に戻るんですが、開催方法①について、現地の人とどうやり取りをしたら、リアルなニーズを引き出せるか、また②、③で企業の方々へビジコンのように発表して企業の皆様に関心を持ってもらえるか、といったところをモデル化していったらいいと思っています。そして、最終的な報告書として発表するにとどまらず、その過程をSNSで発信していったり、固定したグループを作って、毎年継続して新たに募集をしていったり、その過程をまた発信していったり、また募集をして、とそういったサイクルを作りたいと思いますし、それをオープンソース化していったり、全国的に広まることを期待しています。

<質疑応答>

Q. 現地でアクティビティをされると発言があったのですが、どれくらいの期間、体験される予定なのでしょう。

A. 短、中、長期とご紹介しましたが、長くても2週間を予定しています。また、期間を問わず、現地の方と民泊という形で一緒に生活をするという形が相応しいと考えています。その中で視察をしたり、現地の方を招いて一緒にワークショップをやる、若しくは1対1でお話を聞く、というのを参加者が選んだ期間の中で出来るだけやっていただけたらいいかと思っています。

Q. その上で企業に提案をされていくと思います。その内容としては、どういったものになりますか？

A. 企業に対しては、一緒に商品開発をしたり、福島のPRしたいところと一緒にやっていきたいと思っています。実際に参加すると案が出てくると思います。現地で体験したり、民泊で感じたことを持ち帰って、その後zoomでミーティングをしたり、プレゼンをしたりしながら、最終的にはJヴィレッジでビジコンのような形で提案する、という流れを考えています。

● 2. 次年度の取組に関する意見交換

論点 1

今年度の実践の場で提案された各チームのプログラム案を次年度どのように具体化できるか。

- 復興庁が「ふるさとを語り合う」ワークショップを開催し、プログラムのひな型を作成。
 - ひな形を使って、各副代表団体も試行的に同プログラムを実施できないか
 - 複数回実施した成果を束ねて、J-VILLAGEで総括的に発信できないか
- 各副代表団体において、短期・中期・長期のアクティビティ・民泊として、どのようなものが提供できるか。
- 地域づくりの提案に関心のある企業等をどのように集められるか。
- その他、各チームのプログラム案の具体化方策としてどのようなことが考えられるか。

● 3. 今後の協議会運営に関する意見交換

論点 2

多様な主体間の更なる情報共有や連携を進めるために
今後の協議会運営はどのようにあるべきか。

- 次年度以降の協議会については、これまで同様各県ごとに3回程度の意見交換会と実践の場を開催することをベースに運営する方向。
- 一方、多様な主体間の更なる情報共有・連携、今年度のようなプロジェクトの自走を目指すためには、以下について検討が必要。
 - ✓ 他の官民のネットワークとのつながり・相乗効果
 - ✓ 各県での意見交換会・実践の場における取組や成果との連動・連携
- **連携する他の官民のネットワークとして、どのようなものがあり得るか。**
また、各県で連動・連携できる取組として、どのようなことが考えられるか。

● 参考：実践の場（プログラム日程）

コンテンツ	詳細
(1日目) 集合8:30 福島駅出発バス移動 (8:35~10:35)	<ul style="list-style-type: none"> 車内にて事業説明及び参加者、関係者の自己紹介 事業説明時にビデオ放映 (一社) まちづくりなみえ 双葉到着後石山さんによるガイド
視察①：東日本大震災・原子力災害伝承館 (10:45~11:45)	<ul style="list-style-type: none"> 館内見学
視察②：中間貯蔵施設 (12:05~13:15)	<ul style="list-style-type: none"> 中間貯蔵施設内見学
昼食（富岡ホテル） (13:35~14:25)	
視察③：福島しろはとファーム (14:45~15:25)	<ul style="list-style-type: none"> 施設内見学
ディスカッション① (15:45~16:55)	<ul style="list-style-type: none"> 福島大学 鈴木 典夫 教授 講和 一般社団法人 まちづくりなみえ 石山 佳那 講和
ディスカッション② (16:55~18:00)	<ul style="list-style-type: none"> 参加者が感じた課題の共有 テーマ案の共有 マグネットテーブル形式でチーム分け
夕食・懇親会 (18:30~21:00)	
(2日目) ディスカッション③ (9:00~11:30)	<ul style="list-style-type: none"> チームごとにテーマ案の設定 テーマを設定した背景、参加者、開催方法を設定
とりまとめ (12:30~14:30)	<ul style="list-style-type: none"> 発表用模造紙の作成 発表リハーサル
記者発表 (15:00~15:30)	<ul style="list-style-type: none"> Jヴィレッジ 挨拶 3チームからテーマ案を発表 質疑応答

● 参考：実践の場（1日目の様子）

（1）実施の様子＜1日目＞

視察① 東日本大震災・原子力災害伝承館（10:45～11:45）

- 語り部等から、震災前の暮らし、発災、それ後の復興の過程などの説明を受ける。



視察② 中間貯蔵施設（12:05～13:15）

- 現地スタッフから、中間貯蔵施設の概要、除去土壌の搬入状況などの説明を受ける。



視察③ 福島しろとファーム（14:45～15:25）

- 同社の滝澤氏から、同社の歩みや施設・農機具等の説明を受ける。



ディスカッション①（15:45～16:55）

- 福島大学鈴木典夫教授、一般社団法人まちづくりなみえ石山佳那氏から福島県の復興の取組について話を聞き、福島の実状などについて議論。



ディスカッション② 1日目（2月16日）16:55～18:30

- 次年度の「話し合いの場」におけるテーマ設定を行うワークショップ及びマグネットテーブル形式によって、A～Cの3グループに分かれた。
- 「現住民も地域への愛が深まる復興」、「若者を福島にどのようにして呼び込むか」、「学びの場」、「安心・安全のため、どのように除去土壌や処理水の情報発信をしていくか」、「学びの場」、「自死を減らすには→幸福の高まる暮らし」、「風評被害の固定観念化（安心⇔安全の隔たりを埋めるには？）」、「いつまでも「被災地」でいいのか」、「どこ（まで）が復興なのか」、「ホープツーリズムの認知拡大」、「出来ること・求めること」、「何を求めて「東北の復興完了」？」、「私はどう生きていきたいか（どう生きるか）」、「お互いの大切なものを尊重しながらものごとを進めていくには」、「日本のあるべき姿とは？（人口集中/高齢化社会）」、「30年後の（22年後）の中間貯蔵施設の在り方」等の様々なテーマ案が出された。



● 参考：実践の場（2日目の様子）

ディスカッション③（9:00～11:30）

- ・ チームごとにテーマ設定、テーマ設定の背景、参加者、開催方法を検討。
- ・ 検討した結果を参加者及び関係者に共有。



とりまとめ（12:30～14:30）

- ・ チームごとに発表用模造紙に発表内容を整理のうえ清書。
- ・ 完成後リハーサルを実施。



記者発表（15:00～15:30）

- ・ 各チーム登壇し、発表者が代表してテーマ案、テーマ設定の背景、参加者、開催内容を説明。（発表内容は次頁以降に記載）
- ・ 3チームの発表終了後に質疑応答。（質疑内容は次頁以降に記載）



● 参考：実践の場（参加者）

参加学生・社会人 一覧

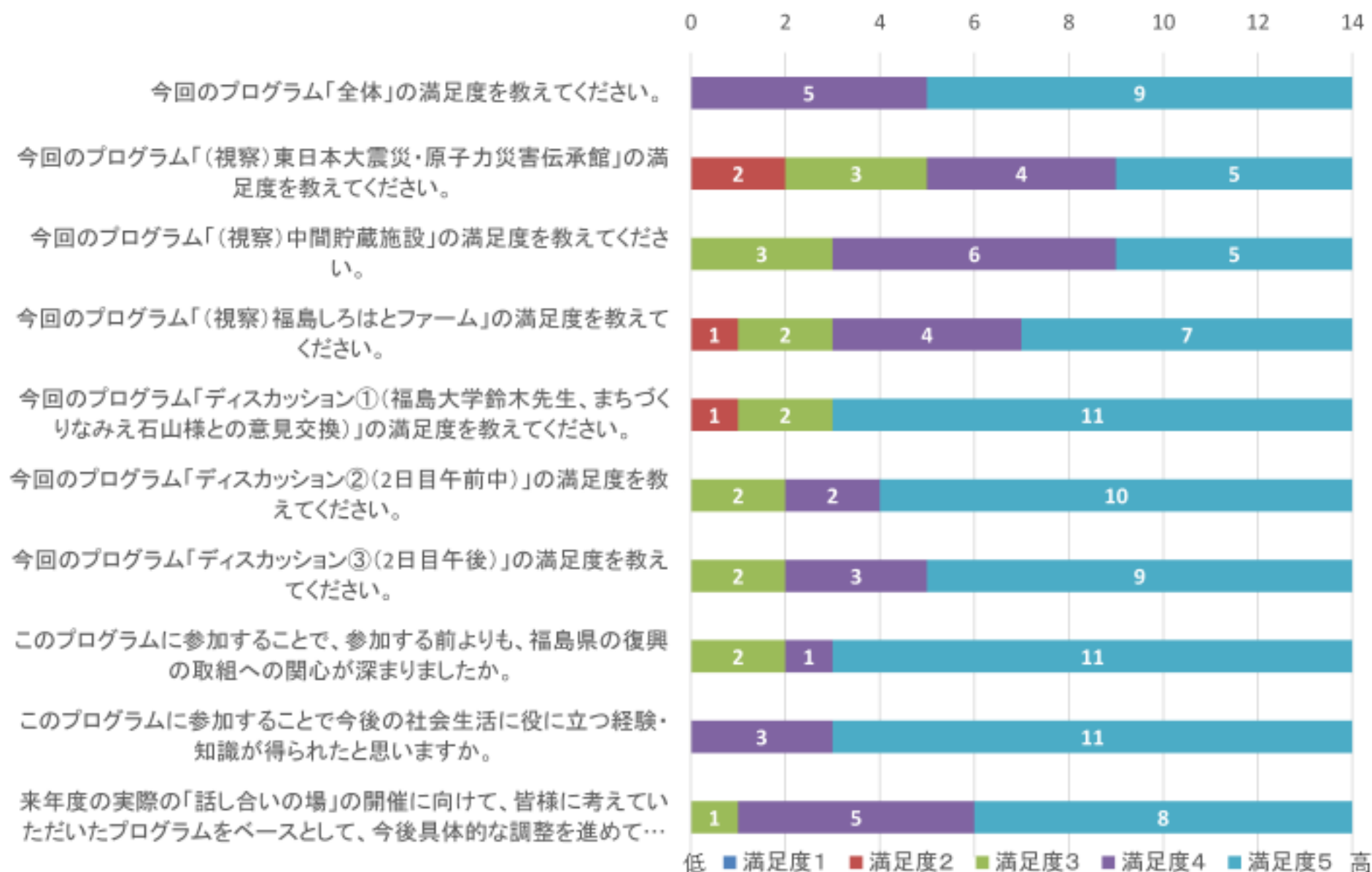
参加者 (14名)	発表チーム	所属部・課名	性別	学年	年齢	出身地
	A	東京大学	男性	1年	19歳	大阪府岸和田市
	A	認定NPO法人底上げ	女性	－	23歳	山形県山形市
	A	株式会社JTB 福島支店	男性	－	28歳	宮城県亘理町
	B	福島大学	女性	1年	18歳	福島県福島市
	B	福島工業高等専門学校	男性	5年	20歳	福島県いわき市
	B	福島工業高等専門学校	女性	5年	20歳	福島県石川郡
	B	東京大学	男性	2年	20歳	千葉県我孫子市
	B	早稲田大学	女性	4年	22歳	神奈川県藤沢市
	C	福島大学	女性	1年	19歳	新潟県新潟市
	C	東北大学	女性	3年	21歳	福島県福島市
	C	長崎大学	女性	2年	21歳	長崎県長崎市
	C	東京大学	男性	4年	22歳	兵庫県川西市
	C	早稲田大学	女性	4年	23歳	千葉県市川市
	C	女子美術大学	女性	3年	21歳	新潟県新潟市

（参考）参加関係者 一覧

	氏名	所属・課名
主団体	愛川 雄一郎	株式会社 Jヴィレッジ 事業運営部 副部長
ガイド	石山 佳那	一般社団法人 まちづくりなみえ 地域おこし協力隊
副代表団体	天野 和彦	一般社団法人 ふくしま連携復興センター 代表理事
	伊藤 孝	株式会社東邦銀行法人 コンサルティング部公務・地域商社事業課 課長
	鈴木 典夫	国立大学法人 福島大学 学生団体福島大学災害ボランティアセンター顧問、福島大学地域未来デザインセンター長
	藤室 玲治	国立大学法人 福島大学 地域未来デザインセンター 特任准教授（復興創生担当）
	村田 文夫	福島県 企画調整部 政策監
	千葉 尚	福島県 企画調整部 企画調整課 主事

※ この他、復興庁・復興局から7名、また、事務局スタッフが参加

● 参考：実践の場（参加者アンケート（5段階評価））



● 参考：実践の場（参加者アンケート「自由記述」）

「プログラムの内容について」

- ・ 今回はありがとうございました。様々な人と様々な意見を交流することができてとても有意義でした。大学生だけでなく**社会人の方ともお話ができて良かった**です。
- ・ 参加する前は人数少ないなあと思っていたが、実際に参加してみて多すぎず少なすぎず、**議論を深めるにはちょうど良い人数**でした！！
- ・ ディスカッションは全体を通して多様な意見を聞くとともに発表できました。また、宿泊先も福島復興の証の1つである**J ヴィレッジであったことも良かった**と思います。
- ・ スケジュールが詰まっていたので、**もう少し長い期間**だともっと一つ一つの施設をゆっくりみれたりするかなと思いました。
- ・ 時間が限られているため難しいと思いますが、東日本大震災・原子力災害伝承館を時間をかけてしっかり見たかったです。
- ・ **議論の時間がもっとほしい**と感じました。
- ・ 懇親会などで真面目な議論になることが少なく、自分もその時間はプライベートな話を楽しむことを優先していました。しかし、参加しようとした背景や興味関心、今まで得てきた知見などをもっと共有されたいと感じました。
- ・ 大学の先生や浜通りの地域実践者が参加しているのに、交流する機会が少なくもったいないと感じた。
- ・ 伝承館は最初の大事なインプットなので、ちゃんと人数を分け、ガイドを付ける必要があると感じた。
- ・ ディスカッションをする途中で、どこまで実現可能性があるのか？お飾りではないのか？とチームメイトと不安になる場面が何回もあった。

「運営面について気が付いた点・改善点など」

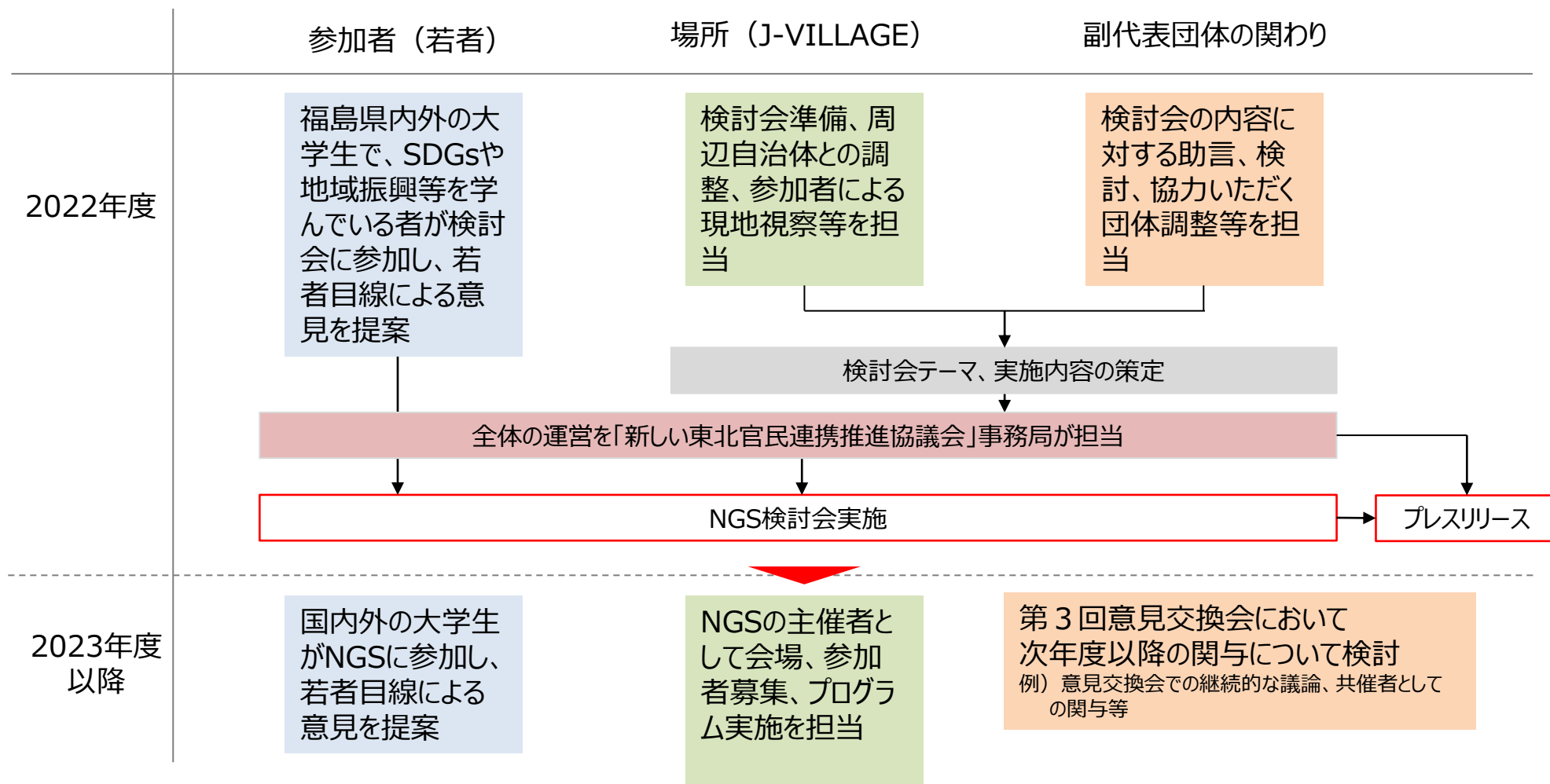
- ・ **運営側に女性が少ない**点が気になった。
- ・ 運営側が男性ばかりであったことに違和感があった。
- ・ 女性は生理等もあるため、シャワー付きの部屋の方がありがたいのではないかと感じた。
- ・ **少し大人が多くてびっくりしました**が、徐々に慣れたり懇親会などでお話しをしたりして理解することで活動しやすくなりました。もう少しアイスブレイク多くてもいいのかなと思いました。
- ・ 最初の方に参加者同士で打ち解けられる場があればいいのかもしれないと感じました。
- ・ ディスカッションの最初に福島について付箋に自分の思いを書く時間があっと思うのですが、その時間をもう少し長くしていただけるといいかなと思いました。
- ・ プログラム内容に直接かわるのではない領域、例えば参加している大人の方々の福島のイメージや今まで行ってきた活動、興味を抱くようになったきっかけなどの声も聞きたいと思いました。
- ・ **1日目夜のワークショップ**は1人1人が発表する形で、参加者同士の意見交換やディスカッションが生まれず**非常にもったいない**と感じた。そして、待っている方も手持ち無沙汰。ワークショップや講演全体の雰囲気は固く、自由に話す雰囲気でない。
- ・ 「大人」の皆様からのファシリやアドバイスに助けられた面もあるものの、私たち若者の存在がいわゆる「形式的参加」に終わってしまうのではないかとモヤモヤした。
- ・ **紙での作業や資料が多すぎる**と感じた。特にコロナ以降、学内に止まらず学外でのインターン等でも、資料、議事録、はたまた資料作成までオンラインで共有することに慣れたこともあり、今回の旅行は紙ベースの資料や作業しかなく、やりにくさを感じた。
- ・ 「学生」に限らず広く若者が参画できると良いのではと感じた。
- ・ 1泊2日ではなく、**2泊3日**や、**事前にオンライン**で会えればさらに多くの見学場所に行けたり、議論を熱くできたと思いました。
- ・ 伝承館導入前に、もう少し福島についてを知る機会とゆっくりと見る時間があればよかったと感じる。

● 参考：福島県の過年度の取組

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
テーマ	人材×日本酒（日本酒を核にしたネットワークづくりの検討）	食・観光・伝統工芸など、地場産業の担い手確保	福島県での暮らし方・働き方に関する理解促進（魅力付け）	東日本大震災から10年目にあたって	学生主体のコミュニティを組成し、学生目線での発信を行う
実践の場	<p>「福島県産品・伝統工芸品のPR（福島市）（福島県観光物産館）」 「アイデアソンの開催」（東京都千代田区）</p> <p>福島：日本酒と酒器の組み合わせ商品の展示・販売 東京：Made in Fukushima商品をつくることのアアイデアソン</p>	<p>「ふくしまキャリア探求ゼミ～ふくしま新しい働き方・チャレンジの仕方について知ろう～」（福島市）</p> <p>福島県にU/Iターンをして新たな生活・仕事のスタイルを確立した先駆者の実体験を伝え、理解を深めてもらうためのワークショップ</p>	<p>「ふくしまキャリア探求ゼミ～自分らしいキャリアデザインを考えよう～」（福島市）</p> <p>福島県内在住の高校生・大学生に対し、県内には魅力的な仕事・働き方が多くあることを知ってもらうために、県内で活躍しているゲストと対話し、学生自身が将来を考えるワークショップ</p>	<p>「ふくしまプラクティス2020 — 実践者が語る10年の経験とこれからの挑戦 —」（双葉郡楢葉町）</p> <p>挑戦的な活動をしている多様な担い手に自身の活動に関する内省、言語化をしてもらう機会を設け、各々の今後の活動への糧としてもらうことを目的としたイベント</p>	<p>『『大学生発 福島キャリア新発見』読む会』（オンライン）</p> <p>地域の中で魅力のある企業の若手社員を対象とした取材記事「大学生発 福島キャリア新発見」の創刊を目指して活動。次年度以降の福島県の企業の魅力を発信する活動の拡大と、取材を行った学生の皆様の成長を目的に、実践の場をオンラインで開催</p>

● 参考：令和4年度の実施の狙い・全体像（第2回意見交換会資料より）

- ・ タイトル案：「The Next Generation Summit in J-VILLAGE」（以下NGS）
- ・ 2022年度は、来年度以降、若者同士の「話し合いの場」を作る前準備として、0回目の「サミット」を開催する



● 参考：岩手県 実践の場の概要

開催日	2023年1月19日（木）・20日（金）	開催場所	岩手県宮古市
タイトル	みちのく潮風トレイル体験から三陸沿岸地域の復興の姿を知るエクスカージョンプログラム モニタリングツアー【宮古コース編】		
企画目的	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2023年のG7、2025年の大阪・関西万博、各種MICE等により国内外から東北に訪れる方が生じる機会を捉え、具体的なプロジェクトの企画・実施を通じて、地域の抱えている課題解決や国内外への情報発信につなげる。 ○ 具体的なプロジェクトとして、みちのく潮風トレイルを活用し、行政関係者や学者、研究者など知識層を主なターゲットとして想定した、岩手県沿岸のエクスカージョンプログラムを検討。 ○ モニタリングツアーの実施により、以下効果を狙う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回のモニタリングツアーのコース自体に関する評価・ブラッシュアップ ・ 同じコースを体験した自治体、旅行会社、現地の事業者等が、エクスカージョンプログラムを推進する際の課題等について意見交換することにより、官民のネットワークづくりと課題の共有 		
実施内容	<p>1日目： 盛岡集合・宮古にバス移動ー浄土ヶ浜レストハウス・「浄土ヶ浜」見学・宮古うみねこ丸乗船ーみちのく潮風トレイルー浄土ヶ浜ビジターセンター（1日目プログラム終了）</p> <p>2日目： 宮古市内ホテル発バス移動ー田老学ぶ防災「震災学習・防災エコツアー体験コース」体験ー参加者による意見交換（2日目プログラム終了）</p>		
参加者	30名（うち、招待者15名、主団体2名、副代表団体5名、復興庁・復興局8名）、他事務局		

● 参考：宮城県 実践の場の概要

開催日	2023年1月30日（月）	開催場所	宮城県仙台市・松島町 ・東松島市・石巻市
タイトル	宮城県沿岸地域エクスカーションプログラムモニタリングツアー		
企画目的	<ul style="list-style-type: none">○ 2023年のG7、2025年の大阪・関西万博、各種MICE等により国内外から東北に訪れる方が生じる機会を捉え、具体的なプロジェクトの企画・実施を通じて、地域の抱えている課題解決や国内外への情報発信につなげる。○ 具体的なプロジェクトとして、行政関係者や学者、研究者など知識層を主なターゲットとして想定した、宮城県の被災状況・復興の状況の理解を深めていただくとともに、防災に関する意識を高めるためのエクスカーションプログラムを検討。○ モニタリングツアーの実施により、以下効果を狙う。<ul style="list-style-type: none">・ 今回のモニタリングツアーのコース自体に関する評価・ブラッシュアップ・ 同じコースを体験した自治体、旅行会社、現地の事業者等が、エクスカーションプログラムを推進する際の課題等について意見交換することにより、官民のネットワークづくりと課題の共有		
実施内容	東北大学出前授業（仙台駅付近会議室）－ 仙台うみの杜水族館見学 － 松嶋離宮での食事 － 東松島語り部ツアーに参加 － 「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」見学 － 参加者による意見交換		
参加者	25名（うち、招待者12名、主団体3名、副代表団体6名、復興庁・復興局4名）、他事務局		